



「短歌と向き合う」授業づくり：  
中学二年「短歌十二首」の実践から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金田, 昭考 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000144">https://doi.org/10.32150/0002000144</a>

## 「短歌と向き合う」授業のしくり

### — 中学二年「短歌十二首」の実践から —

金田 昭孝

#### 一 はじめに

平成二七年一二月、私は北海道教育大学札幌校で講義をしていた。講義名は「中学校国語科教育法Ⅳ」。対象は国語科専攻の学生である。担当したのは、後期全十五回の講義のうち分担された四回だった。中学校現場の様子が学生に伝わるようにとのねらいで設定されたものであった。

私は、できるだけ具体的な授業の姿で現場の国語科教育について伝えたいと考え、「詩歌教材」に内容を絞って講義を行うこととした。最初に、自分が受けた「詩歌教材の授業」について、学生にアンケート形式で聞いてみた。

(A) 私が受けてきた詩歌の授業では、正解があり、時には自分の解釈を間違った考えとして扱われたことがあります。

(B) 私が今まで受けてきた詩歌の授業では、先生が一つの言葉に即して解釈をして、結果はこうなりますと説明し、内容を理解して終わりでした。

(C) 私はこれまで、詩歌の授業は先生が望んだ解釈通りに答えなければならない、正直つまらない授業だと思っていました。

(D) 詩歌教材の授業は、何をどう読み取ればいいのかわからないから苦手だという生徒が多かったように思います。文字数が少ないので、答えが漠然としてよくわからず、苦手意識につながると考えていました。

「詩歌教材の授業」について否定的な感想が多かった。肯定的な感想は、草野心平の詩「河童と蛙」の音読活動が楽しかったというくらいであった。短歌教材について、肯定的な印象が残っている教材は、全く挙げられなかった。

つまり、国語を専攻する学生でさえ、その多くは、詩歌の授業を魅力的であると思っていないのである。まして、短歌になじみの薄い中学生はなおさらである。

では、どうすればよいのであろうか。  
安藤修平氏（注1）は、次のように述べられた。

中学校での「短歌」教材の指導は、詩と同じく、圧縮された表現から湧き起こる情景や心情をイメージ豊かに読み味わうことを通して「読み味わい方」の基本を学ばせることにある。

意を取って示せば、一人一人の学習者が、短歌に表現されている圧縮された表現から、自分なりに想像力を働かせ、広く深く読み取ることを目指していく授業づくりをすることが大切なのである。

先述した大学生のコメントにおいて、(A)(B)(C)については、指導者の教材への向き合い方の問題が垣間見える。答えが一つしかないというところから問題があるのだ。言葉遣いや言葉の配列、情景や心情の描き方などから、詩歌は多様な読みができるはずである。定説こそが絶対であるという考え方から脱却しなければならない。

(D)については、教材の特質の捉え方に問題がある。加えて、学習者がどう学ぶかの道筋がないのである。短歌は、三十一文字で短いからこそ、作者が言い尽くせないことも多い。だからこそ、言葉一つ一つをじっくり捉え、豊かに想像できると考えればよい。そのとき、個々の学習者の解釈は、互いに尊重されなければならない。このような学習者集団の中で、言葉と向き合うことにより解釈が深まり、広く深い短歌の鑑賞の仕方が身についていくのではないだろうか。

短歌を教材とする授業では、学習者を主体的に活動させようと考え、グループ学習を行うことがある。しかし、単に書かれているものを引用したり、友達の考えをそのまま発表したりしてしまうなど、発表自体が目的化され、学習者が自分なりに短歌の言葉をかみ砕かずに終わる場合もあることに注意しなければならない。私もかつてそのような授業をしたことがある。その反省から、「短歌と向き合う」場面を学習者に保障するにはどうすればよいかを、常々考えてきた。

以上を鑑み、本稿では「短歌と向き合う」ことをねらいとして行った単元学習の一端(注2)を報告し、「短歌と向き合う」とはどのようなことを考究していきたい。

## 二 単元のあらまし

六時間扱いで行った短歌についての単元学習である。そのあらまきは、次の通りである。

〈第一次〉教科書掲載教材である馬場あきこ「新しい短歌のために」を読み、短歌鑑賞の基本を知る。

### 一・二時間目

- ・教科書掲載の短歌をリズムよく音読する。
- ・表現の工夫や言葉遣いに着目し、それぞれの短歌から感じられるものを考える。

- ・表現されている情景や作者の思いを想像する。
- ・表現技法や句切れを捉える。

〔第二次〕教科書掲載教材である「短歌十二首」から一首を選び、鑑賞を深める。

### 三時間目

- ・「短歌十二首」を音読する。
- ・気に入った短歌一首について、その理由を書く。
- ・友達と「対話」し、鑑賞を深める。

### 四時間目

- ・気に入った短歌一首について、その良さが伝わるように鑑賞文を書く。

〔第三次〕各自が短歌を創作し、教室で「歌会」を行う。

### 五時間目

- ・「旅（宿泊学習）」「四季」「つれづれの思い」等から題材を探し、短歌を創作する。

### 六時間目

- ・クラスメートの短歌の中から、気に入った歌を数首選び、その理由を書く。
- ・一首を取り上げ、その良さを発表する。（全員が発表）
- ・取り上げられなかった歌については、指導者が良さを伝える。

第一次では、まず、馬場あきこ氏の解説文「新しい短歌のために」を読み、短歌鑑賞の基本を知る。掲載されている短歌六首（注3）について、音読し、表現の工夫や言葉遣いに着目する。そして、それぞれの短歌から感じ取れるものを考え、情景や作者の思いを想像し、表現技法や句切れを捉えるというものである。鑑賞に取り組む前に、短歌についての基本を学習者は知っておいた方がよいと考えたのである。

第二次が、いわゆる短歌鑑賞の時間である。教科書では、「短歌十二首」というタイトルで、窪田空穂から栗木京子まで十二首（注4）が並んでいる。十二首もの短歌をどう指導するか。このような教材はその扱いに悩むところが多い。十二首すべてを均等に扱うと学習者の方も飽きてしまうであろう。そこで思い切って、この十二首から「自分が気に入った一首を選び、その良さを伝えることができるようにする」という授業にしたのである。学習者は、短歌の基本についてすでに第一次で学んでいるので、その知識を応用させて取り組める。

第三次は、鑑賞の仕方を学んだあとに実際に短歌の創作を行う。そして、作者名を伏せて「歌会」を行うというものである。クラスメートの短歌の中から、気に入った数首を選び、その理由をノートに書く。その後、一人一人が選んだ一首を取り上げ、その良さを発表する。作者は誰かわからないのだ

が、時には創作者自身も気づいていない良さが話されることもある。そんなときは、創作者が思わずにこつとする場面も見られ、ほほえましい。歌の良さについて、実感的に学び合う場となるのである。最後まで取り上げられなかった歌については、指導者が良さを伝えて教育的に配慮する。

この「歌会」には、短歌を鑑賞する力を確かにするというねらいもあるが、それとともに学習者が互いに良さを認め合うことにより、学習集団の親和性を高めるという効果もある。学習者集団を育てる良い機会になるとも考えて、私は「歌会」の実践を続けてきた。

単元学習のあらましは以上である。次に、第二次の短歌の鑑賞の場面を詳述し、「短歌と向き合う」ことに焦点を絞って論考を進めていく。

### 三 「対話」の様子から

第二次では、まず、「対話」を行いながら短歌についての鑑賞を深めていく。

三時間目（注5）は、音読活動から始めた。後追い読み、起立読み、ペア読みなどで、すらすらと声に出すことにより、自然に短歌に親しんでいくことをねらったのである。

次に「気に入った一首の鑑賞文を書く」ことが第二次のゴールであることを指導者から伝えた。学習者は気に入った一

首を決め、選んだ理由をノートに書いていった。

A子は、栗木京子の歌「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」を選んだ。選んだ理由を次のように書いた。

君と観覧車にのった思い出は、君には一回だけのものだけれど、自分には一生の思い出だという切ない片思いの気持ち伝わってきたから。

その後、「対話」を行うのである。

「対話」は二段階で行う。一回目は、同じ短歌を選んだ者同士での情報交流である。

A子は、栗木京子の歌を選んだ者同士での情報交流を通し、「観覧車」には比喩の意味も考えられることに気づいた。また、必ずしも「切ない片思い」ととらえる友達ばかりでないことも知ったのである。その結果を、次のようにまとめている。

この歌の解釈を「観覧車が回るように、思い出が繰り返し浮かんでくるようだ。君には一日だけの時間だったかもしれないが、自分には一生覚えていたい思い出だったのだ。当時は切ない片思いだったけれど、今は大切な思い出となっている」と考えられるようになりました。

友達との情報交流から、比喩が効果的に用いられていたたり、観覧車にのった当時と短歌をつくっている今の心境の両方を読み取れたりすることに気づき、鑑賞の幅を広げたのだ。

次に、B子の例である。B子は、若山牧水の「白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」を選んだ。選んだ理由を次のように書いている。

空や海の青色が多い中、白鳥は青色に染まらず、真っ白にただよう。その様子を想像するとキレイだと思ったから。

B子は、きれいな情景を想像できるところに、この歌の良さを感じ取っていた。一回目の「対話」、つまり情報交流を通し、「空、海のどちらの色にも染まらない自分の意志」を感じ力強さのある歌という解釈もできることを友達との交流から学んだ。また、想像ではなく、白鳥も空も海も実景として見ていると考えた友達がいることも知った。その結果を、次のようにまとめている。

この歌の解釈を「白鳥が、空の青や海の青といったきれいな青を背景に、その青に染まらない意志をもち、ただ一羽で飛んでいるのを見ていると何か悲しい気持ちになってくる」と考えられるようになりました。

友達との交流により、周囲の情景のみでなく、白鳥が表す心情にも考えを及ぼし鑑賞の幅を広げたのである。

このように、学習者は、一回目の「対話」で友達と情報交流することにより、自分の考えを広げながら自らの解釈を確立していったのである。

二回目は、自分とは異なった歌を選んだ友達との「対話」である。これは、基本的な形式を決めて行った。「お願いします」で始め「ありがとうございます」で終わるようにしたのだ。ちよつと形式ばっているという見方もあるかもしれない。が、ここで考えたのは、型があることでどの学習者も「対話」に参加しやすいのではないかということである。もちろん、自由に話した方がのびのびと自分の考えが話せ、「対話」がしやすい学習者がいることも確かだ。しかし、話すのが苦手な学習者は、どう話すのか、何をどんな順番で話すのかというところでつまずく。「対話」ということ自体が成り立たない。そこで、「対話」のフォーマットをつくり、そこに言葉をはめ込めば、どの学習者にも一応の「対話」が成り立つよう配慮したのである。

先ほどのA子は三名と「対話」を行った。その中でC男とは次のように「対話」している。

C男が選んだ歌は、石川啄木の「不來方のお城の草に寝ころびて 空に吸われし 十五の心」である。

A子「お願いします。」

C男「お願いします。」

A子「私は、栗木京子さんの歌を選びました。解釈は、『観覧車が回るように、思い出が繰り返し浮かんでくるよ

うだ。君には一日だけの時間だったかもしれないが、自分には一生覚えていたい思い出なのだ。当時は切ない片思いだったけれど、今は大切な思い出となっている。』です。当時の切ない片思いを感じさせるところが印象に残ります。一日と一生を対比させて述べていて、自分と相手の違いを際立たせているようにも思ったので、この歌が良いと思いました。」

C男「素晴らしい解釈ですね。対比させて言葉を使っているところがよくわかりました。僕は、石川啄木の歌を選びました。解釈は、『岩手のお城の草に寝ころんでいると、夏のさわやかな風が吹いてきて、悩みも空に吸い込まれるようだ。』です。この歌の良さは、情景が伝わりやすいところです。最初に不來方というインパクトのある地名を出して読者を引き込んでいる点もこの歌の良さです。」

A子「そうですね。確かに、不來方という表現にはインパクトがあると私も思います。情景が伝わりやすいという点をもう少し説明してもらえますか。」

C男「はい。なんか、お城の上の空はとても大きな感じがするじゃないですか。そんな大きな空と小さな自分が対比されていて、よりいっそう大きな自然の中に小さな自分が吸い込まれるような気がします。そこから作

者の孤独感がとてもよく伝わる気がします。」

A子「よくわかりました。とても鋭い見方ですね。情景と心情の関係がよくわかります。私も歌の中の対比を考えていたので、勉強になりました。ありがとうございます。」

C男「ありがとうございます。」

異なる歌を選んだ者同士での「対話」の中で、まずA子、C男ともに自分でとらえたその歌の良さをしっかりと説明できている。つまり、自分の考えを確立できたと考えられる。さらに内容は異なるが、ともに「対比」を共通項にして鑑賞を深めている。ここで「対比」が出てきたことにはある意味偶然性もあるが、A子、C男ともに短歌を鑑賞するポイントの一つを学び合ったとも言える。つまり、「対話」を通して、鑑賞する力がより確かになったと言えるだろう。

ここで学んだことを、A子は次のように書いている。

最初の交流では、同じ短歌ですが、一人一人違う考えを持っていて、自分が分からなかった考えを知ることができました。二回目の「対話」では、自分の短歌ではないものでの交流でしたが、一人一人、深くまで探ろうとしていて、交流がとても素晴らしいものになりました。

また、B子は次のように書いている。

それぞれの歌から感じ取ることは、人それぞれ違つことを改めて感じた。質問したり質問されたりすることで、その『歌』についてよりくわしく学びを深め合うことができたと思う。ここで学んだことをこれから書く鑑賞文につなげていきたい。

二人の記述から、「対話」を取り入れたことは、「短歌と向き合う」ことに有効に機能したと言える。すなわち、自ら言葉を表出して、その短歌について豊かに語ろうとする過程そのものが、「短歌と向き合う」ことに他ならないと考える。

#### 四 「鑑賞文」の記述から

「対話」を通すことで、自分が選んだ短歌に対する見方、考え方が広く深くなつていく。その成果は、四時間目に記述した鑑賞文の中に表されるのである。

次に、栗木京子の短歌をとともに選んだA子とD男の鑑賞文を紹介する。

A子

私には、相手に恋する作者の気持ち伝わってききました。好きな人と一緒に観覧車に乗っていて、ずっとこのままいたいという願いがあるように思えました。あなたにとってやさしい一日の出来事でも私にとっては一

生の思い出になったと相手に対して言いたくても言えないもどかさや、相手と自分との価値観の違いによる切なさを感じ取れます。そして、私は作者が好きな人に思いを伝えることはできなかったのではないかと思えます。「想ひ出」という言葉が出てきていることから、もう相手の気持ちを知ったうえで、この気持ちを思い出の一つにしようとしていると思います。

相手に対して、「一瞬」ではなく、「一日」を使ったことから、今日一日だけでも私のことを覚えていてねという、作者の相手に対する最後の最後の切ない願いが伝わってきました。

D男

目の前には鮮やかな海。そしてこの遊園地に一緒に来た君がいる。首を横に回すと、風であるにも関わらず、高層ビルが輝いている。後ろには新芽だらけの山が背伸びをし合っている。観覧車は、ゆっくりゆっくりと「想ひ出」を録画するかのようになりに上昇して回っている。君はうれしそうに海の一つ一つの光を見つめている。そうやって君と話したり笑ったりしているうちに、だんだん観覧車は下降していく。君には男友達と行った楽しかった単なる一日だったのかも知れない。でも僕には大切な大切



な一生の「想ひ出」になったのだ。

この短歌を、作者の気持ちになり、情景を思い浮かべながら、思うままに書いてみた。この短歌は、「回れよ回れ」と想い出をスクロールしたり、「君には一日我には一生」と君と自分を対比させたりしている。そこが心に響いた。

A子もD男も、恋する思いや、「一日」と「一生」の対比が、よく読み取れている。しかし、二人のこの短歌の読み取り方には違いもみられる。

A子は、作者の心情を中心述べ、短歌に散りばめられた言葉を掬いながら、切ない願いを読み取っている。それに対しD男は、短歌から浮かぶ情景と心情を述べ、観覧車の動きを録画するかのようにしながら、大切な一生の思い出になった心情を読み取っている。

このように、A子、C男ともに、自分の想像力を働かせながら心情や情景を豊かに読み取っている様子が見て取れる。もう一例、石川啄木の歌を選んだC男とE子の例を見てみよう。

C男

この短歌の良さは、まず、言葉の使い方にあると思

ます。初句の「不来方」というのは地名です。具体的な

空間が表現されているので、この短歌を読んだ人はとても歌に入り込めると思います。さらに五句目は体言止めになっていて、読んだ人に強いインパクトを与えます。私も自分とこの短歌の作者を対比させて読みました。

次に、この短歌は情景がとても想像しやすいです。夏にさわやかな風が吹く誰もいない草原で、少年が誰にも言えない悩みや夢を青空にぶつけているのだと思います。十五歳という複雑な年齢で、私と重なる部分も多くありました。少年は何を思ったのか。それを考えると、ますます想像がふくらみます。

このように、この短歌は非常に入り込みやすい歌なのです。

E子

私がこの歌がいいなと感じたところは、次の二点です。一つ目は、十五歳の頃の作者と年齢が近いため、気持ちがよくわかるというところです。十五歳ぐらいのほとんどの人は悩みがあると思います。だから、十五歳の頃の作者は、不来方のお城の草の上に寝ころんで空を眺めていたのだと思います。

二つ目は、「空に吸われし」という部分が、現在の自

分を表しているところです。この「空に吸われし」は今ではなくなった、変わってしまったという意味だと思えます。だから、今ではもう新しい夢や未来へのあこがれができたという読み取りもできると思います。

このように、この歌には良さがあります。しかし、まだ読み取れていない良さもあると思うので、これからこの歌のよさをたくさん見つけていこうと思います。

C男もE子も、自分と年齢が近いことから、気持ちごとらえやすいと書いている。具体的には悩みがあると言うのである。

C男は、年齢が近いからというだけでなく、具体的な「不來方」という地名提示や、「体言止め」という表現技巧により、歌の世界により入り込みやすいという良さをあげている。E子は「空に吸われし」に着目し、過去に「空に吸われた」のだから、今は新たな夢やあこがれができたと言いつつ、表現を基にしながら、深く豊かに解釈しているのである。このように、歌の本質的な部分は共通に読み取りながら、個々の学習者は、より個性的な豊かな読みを展開していく。三十一文字の短い言葉から豊かに想像できることを実感するところこそ、短歌を味わう醍醐味を感じるのである。

## 五 おわりに

以上で、「短歌と向き合う」授業づくりの報告を終える。

今回私が確かめたかったことは、「短歌と向き合う」とはどのようなことかであった。その解としては、「その短歌から伝わる心情や情景等、その歌の良さを、自分なりの言葉で他に伝えようとするとき、その短歌と向き合ったと言えるのではないか」と、現時点での考えをまとめておく。

今回の実践における成果と課題については、次のように考えている。

成果としては、二点あげる。

一点目は、友達との「対話」を通すことにより、学習者個々が自分の考えをより確かに豊かにできたことである。同じ短歌を選んだ者同士での情報交流や、異なった歌を選んだ者との「対話」を通し、情報を交信しながら、自分の考えをより確かにし、友達から学ぶことができたのである。

二点目は、「対話」をしたり鑑賞文を書いたりすることで、短歌に対する見方や考え方を磨くことができたことである。短歌のように短い文学形式では、言葉一つ一つにより重みが増す。言葉にしつかりと着目することで、自分なりの解釈が生まれ、広く深く鑑賞することが可能になってくる。そこに、学ぶ価値が生まれてくるのである。

課題としては、次の二点を挙げる。

一点目は、「対話」の中で聞いた友達のものの方を見方や考え方を自分の中にどう取り込んでいくかという問題である。本稿の中では、「対比」の概念について学び合ったA子とC男の例を紹介した。しかし、対話の中で共通点がうまく鑑賞のポイントとなるようなことがいつも起きるとは限らないのである。偶然性に左右されることも多い。そこが学びと出合う楽しさという考えもあるが、より学び合いの質を高める意味からも、友達との「対話」の中から何を学び取っていくかある程度解き明かし、さらにより良い方法を模索したい。

二点目は、その短歌についての知識を学習者にどの程度まで与えればよいかということである。教材化される短歌の中には、口語で書かれ中学生である学習者が一読で理解できるものもある。しかし、中には文語で書かれ、背景を知らなければ理解が難しいものもある。理解が難しいものの場合、指導者から何らかの形で知識を与える必要があるが、あまりに説明を詳しくし過ぎると、学習者の読みの自由度が狭まってしまう。その塩梅を探らなければならない。ここは、ある意味、指導者の力量に委ねられる部分ともなるであろう。

短歌鑑賞の授業は、定説を知ればよいという考えから脱却しなければならぬ。短く圧縮された作者の思いをその言葉から掬い上げ、想像力を働かせることにより、学習者が自分なりの世界を形成することが大切なのである。具体的に言う

と、石川啄木の歌の知識を正確に持っている学習者を育てるのではない。石川啄木の歌の良さを自分なりに生き生きと語れる学習者を育てることを目指したのである。

(注)

1 「中学校国語教材研究大事典」明治図書・一九九三年刊

「二」『詩』『短歌』『俳句』の教材研究

2 本実践は、平成二七年度、札幌市立新川中学校において筆者が行ったものを基にしている。

3 以下の六首である。なお、使用教科書は、光村図書出版株式会社発行、平成二三年文部科学省検定済の「国語2」である。

正岡子規

川ひとすぢ菜たね十里の宵月夜母がうまれし国美しくむ

与謝野晶子

蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて飛びそめにけり

斎藤茂吉

深々と人間笑ふ声すなり谷一面の白百合の花 北原白秋

海を知らぬ少女の前に表裏帽のわれは両手をひろげていたり

寺山修司

思い出の一つのようそのままにしておく麦わら帽子のへこみ

俵万智

教科書には以下の十二首が掲載されていた。

鳳仙花ちりておつれば小き蟹缺ささげて驚き走る 窪田空穂

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まらずただよふ

若山牧水

不來方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五の心

石川啄木

街をゆき子供の時蜜柑の香せり冬がまた来る

木下利玄

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり

岡本かの子

ぞろぞろと鳥けだものを引きつれて秋晴の街にあそび行きたり

し 前川佐美雄

はとばまであんずの花が散つて来て船といふ船は白く塗られぬ

ぬ 斎藤史

新しきとしのひかりの檻に射し象や駱駝はなにおもふらむ

宮柊二

ジャージーの汗滲むボール横抱きに吾駆けぬけよ吾の男よ

佐佐木幸綱

白き霧ながるる夜の草の園に自転車はほそきつばさ濡れたり

高野公彦

土鳩はどどつぽどつぽ茨咲く野はねむたくどどつぽどど

つば 河野裕子

観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

栗木京子

5 指導案については、次ページに表の形で提示した。なお、評

価の観点については、実践当時である平成二〇年告示の学習指

導要領に準じたままである。

#### 【主要参考文献】

・飛田多喜雄・野地潤家監修「国語教育基本論文集成13 国語科

理解教育論(3) 詩歌教材指導論(明治図書・一九九四年刊)

・尾木和英編「詩歌教材指導改善ハンドブック」(東京法令出版・

一九九八年刊)

・栗木京子「短歌を楽しむ」(岩波書店・一九九九年刊)

・貝田桃子「創作し伝え合う国語科授業」(学事出版・二〇〇〇年

刊)

・俵万智「考える短歌」(新潮社・二〇〇四年刊)

・近藤真「中学生のことばの授業」(太郎次郎社エディタス・二〇

一〇年刊)

(かねたあきのり／元札幌市立陵陽中学校)

指導案 「短歌十二首」

1 授業の目標

- ① 短歌の良さを自分なりにとらえことができる。
- ② 友達と〈対話〉することで、短歌の感じ取り方を広く深くしていこうとする。

2 展開

過程	○生徒の学習活動	○教師のかかわり
課題把握 (おんがひ)	<p>■短歌十二首の音読 &lt;音読で短歌に親しむ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・範読を聞き、句ごとに切れ目を入れる。</li> <li>・後追い読み、起立読み、ペア読みを繰り返し、すらすら音読できるようにする。</li> </ul> <p>□「鑑賞文」を書くことを知り、どう学習を進めたらよいか考える。</p> <p style="text-align: center;">&lt;課題をとらえる&gt;</p>	<p>■最初に範読を行い、漢字等の読みを確認する。</p> <p>■五七七七七で切るように読む。</p> <p>□この学習の最後に、「鑑賞文」を書くことを伝える。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <b>学習課題</b> 「自分の気に入った短歌の良さを説明できるようにしよう。」         </div>		
課題追求 I (おんがひ)	<p>◇気に入った短歌 1 首を選び、ノートにその理由を記入する。</p> <p style="text-align: center;">&lt;理由を考えることで、短歌の内容に迫る&gt;</p>	<p>◇意味のわからない言葉があったり情景がとらえられなかったりする生徒の質問に答える。</p> <p>◇書き進められない生徒へ、アドバイスをする。</p>
課題追求 II (おんがひ)	<p>◆友達と〈対話〉し、短歌の感じ取り方を広げ深める。</p> <p style="text-align: center;">&lt;考えを広げ深める&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・できるだけ 5 人と〈対話〉する。</li> <li>・1 人と〈対話〉が終わったら、得られたことをノートに素早くメモする。</li> </ul> <p style="text-align: center;">&lt;学び取る姿勢を大切に&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1 人との〈対話〉は 2 分。</li> <li>・必ずコメントを返す。コメントには肯定的な内容も入れる。</li> </ul> <p style="text-align: center;">&lt;友達の学びに貢献し学び合う姿勢をつくる&gt;</p>	<p>◆〈対話〉のやり方を伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コメントには、必ず肯定的な内容も入れるように伝える。</li> </ul> <p>◆相手がいない場合は、教師が相手をする。</p> <p>◆全体の雰囲気把握し、うまく行かない場合は、一旦活動を止める。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <b>課題解決の姿</b>            五感でとらえた情景や作者の思い、短歌のリズムなどを手がかりに、自分なりにその短歌の良さをとらえ、「鑑賞文」を書く視点をつかむことができた。         </div>		
課題解決 (おんがひ)	<p>☆ノートに〈対話〉して得られたことを記入する。</p> <p style="text-align: center;">&lt;学んだことを振り返る&gt;</p>	<p>☆時間があれば、数名発表するように促す。</p> <p>★次時の説明。</p>

3 評価

- ① 気に入った短歌とその理由を記入できたか。(ノート・読)
- ② 〈対話〉を通して、「鑑賞文」に書く視点を記入できたか。(ノート・読)
- ③ 意欲的に〈対話〉を行おうとしていたか。(観察・ノートのメモ・読)